

地震と津波 !!

1月15日には、南太平洋・トンガ沖で海底火山が爆発しました。夜7時頃のニュースでは、日本への影響はないとのことでした。ところが、翌日朝起きたところ、太平洋沿岸の日本中に津波警報と注意報が出ていて、びっくりしたものです。

昨年12月3日に和歌山県で震度5弱の地震がありました。これは、自分達にも揺れを感じたものですから、驚きましたが、今回は遠く離れた国、世界地図で簡単に測ってみると8千km(もちろん正確なものではありません)も離れているのです。こんな遠くで起った噴火が原因で津波が来るとは想像し難いことです。そういえば、1960年には南米チリで起った地震による津波が日本まで到達したのです。そういうこともあるのです。日本では地震を感じていなくても、津波が来ることがあるのです。自然災害は怖いのです。

1月22日(土)午前1時8分、日向灘を震源とする地震が起りました。最大震度5強、マグニチュード6.4という結構強い地震でした。この地震は南海トラフの巨大地震に関係する地震とも言われています。



政府の地震調査委員会は今年1月13日に、南海トラフ沿いでM8～9の地震が起こる確率を、30年以内に70～80%、40年以内では90%と上げて発表しました。40年以内ということは、40年先ではないのです。明日、明後日も含まれるということです。

どうしたら完全に身を守れるということも、よく分からないという事です。ひとり一人が自分の身を守るように、気持ちを強く持って地震・津波に対する知識も持ち続けましょう。

災害時の家族連絡方法

先日、日本公衆電話会の方がお見えになりました。「災害時連絡方法のてびき」という冊子をいただきました。皆さんにお配りするだけありませんので、内容を少し説明させていただきます。

家族の間で大規模災害時の連絡方法等を話あって決めていきますか？

災害発生時にはまず自分の身の安全を確保することが一番重要です。

次に家族の安否確認です。

大災害が発生した時に、真っ先に知りたいと思うのは家族、親戚そして知人の安否ですね。

そういえば、27年前の阪神淡路大震災の時に被災地に家族はいませんでした。でも神戸に親戚がいました。被害が大きいというところでした。家から電話をしてみても通じない。そのうち公衆電話の方がかかりやすいと聞こえてきました。でもやっぱり通じませんでした。あの時、私は大阪のいここに電話をして、少しでも近い方が良いのかなど、確認を頼みました。2日ほど後に、神戸の皆が無事だと連絡をもらったのを記憶しています。現在は、携帯電話ですが、これもつながりにくいそうです。遠くの親戚は仕方がないとしても、同居の家族はまず心配ですね。一度家族で、どうするか話し合っておきましょう。ひょっとしたら、近所の被災者の救助活動をする必要もあるかもしれません。家族の安全が確認できたら精一杯の救助活動・応援が出来るでしょう。

そのためにも、我が家の災害時連絡ルールを決めておきましょう。一方通行ではなく、お互いが連絡し合って、早く確認する方法を。



百世安堵

関西大学社会安全学部 近藤誠司

第12回 東日本大震災 刻まれた無念

東日本大震災のことを想うと、福島県いわき市の、ある男性Aさんの声が胸の内に去来する。

Aさんは、津波で妻と子供を失った。Aさんが出張中の出来事だった。突然の別れだった。最愛の家族を守れなかったことを、親族から責め立てられ、Aさんは絶縁した。思い出の詰まった我が家を手放したくないと無理して暮らしているうちに、発災1か月後の最大余震に見舞われた。倒壊した家屋の生き埋めになってしまう。自衛隊によって救助されたが、我が身は、もはや思うように働ける力を失っていた。家族を失い、親族を失い、我が家を失い、仕事も健康も失った。しかしそれでも生きていかねばならない。実入りの良い仕事を探す。結局、崩れかけた原発で働くしかなかった。心の傷と向き合わないようするために、過去を振り向かないようするために、がむしゃらに働いた。その結果、放射線被爆の年間許容量を超えてしまい、また失業した。

Aさんは、自身の経験を一気に話し終えたあとで、『もう、なんのために生きているのか、わかりませんよ』と力なく結んだ。その言葉は、眼前の私たちに差し向けられているというよりも、自分自身の魂のありかを茫洋と探しているような、そんな虚ろな響きを持っていた。

そのとき私は、とっさにAさんに“何か”を言わなければならないと思った。いま伝えなければ、Aさんは、悲しみや苦しみの波濤にさらわれてしまうのではないか。戻って来られなくなるのではないか。すこし経って、私は、「奥さまのぶんも、お子さまのぶんも生きてください。亡くなったご家族は、きっとそのことを望んでいると思います」と伝えた。Aさんは無言だった。言葉は宙に浮いたようだった。でも、そっと握手をしてくれた。

東日本大震災から11年。無念な思いは、今も消えていない。

【館長のひとりごと】

2年前の2月でした。隣町の病院でコロナの感染者が出たのでした。毎日、一人か二人。私は、2月の下旬に宮城県の南三陸で開催される「全国被災地語り部シンポジウム」の分科会へ登壇するよう依頼されていました。飛行機のチケットも届いていました。でも1週間前になっても、感染者が1人、2人と出ていました。その頃、宮城県にはまだ出ていなかった。5日前位に、出席をお断りしました。主催者の副社長さんが、折り返し電話をくれて、「こちらの人は、あまり気にしていないので、予定通り来てください。」でも、1000人以上泊れる大きなホテルが会場です。万が一のことを考えて欠席しました。あの時、まさか2年も続くとは思いませんでした。

今、「いつまで続く」が挨拶言葉です。「薬ができるのが、待ち遠しい。」ですね。

以前は、時々「稲むらの火と濱口梧陵さん」の話をしてほしい、との依頼がありました。地震、津波、語り部のシンポジウムへの参加の要請もありました。この2年間はほとんどありません。当然です、多くの人が集まる集会がありませんから。広川町でも中止や延期になったように。

代わって、雑誌等に原稿を書いて欲しい、文章の内容を点検をとの依頼が増えました。また、それぞれの皆様の書籍文章は残りますので、慎重になります。もちろん、言葉は消えてしまうので、適当に話しているのではないのですが。



このような時代だから、体験することもあります。オンラインで話をする

ことです。ZOOMによるミーティングです。これだと集らなくても、話し合いが出来ます。昨年は、南太平洋の国の大学生と繋がりました。交通費がかからないので、これまで以上に幅広く交流することが出来る利点もありますね。新しい発見です。